

アグラへのぼうけん旅行

A・ゾンマーフェルト

中山 知子 訳



こども世界の文学 4

あかね書房版

こども世界の文学 4

アグラへのぼうけん旅行^{りよ こう}

A・ゾンマーフェルト / 中山知子訳 / 武部本一郎絵



あかね書房版

■こども世界の文学・4

アグラへのぼうけん旅行^{りょこう}

N. D. C, 949 あかね書房 1967 203p 23 cm

1967年5月10日発行 ©

定価480円

訳者／^{なかやまともこ}中山知子

発行者／岡本陸人

印刷／株式会社 精興社

製本／土開製本株式会社

写植／五常写植印刷株式会社

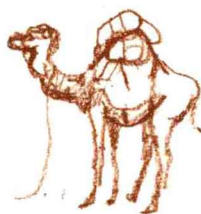
用紙／サツキセイシ特漉上質紙

発行所／株式会社 **あかね書房**

東京都千代田区西神田 3-2-1

電話 東京 (262) 0371~4

振替 東京 64150番



PRINTED IN JAPAN ☆ 著・訳者との契約により検印廃止

はじめに アグラへの道は、なんととおいのでしよう。

自動車でも、まる二日はかかります。まして、あるいて旅を

するなんて、おどなにだつてとおすぎます。けれど、十三さいの

少年ラルーは、カトワの村をあとしして、七さいの妹と、たったふたりで、

あるいていかなければなりません。

妹のマヤは、目が病気で、だんだん見えなくなるばかり。なおしてくれる

病院は、アグラの町にしかないのです。

道は、ひろい平原をつつきっています。夜になると、いつ野獣やどくへビ

におそわれるかもしれません。けれど、村のぼうさんが、いいました。「灰

色のゾウが、おまえたちをたすけてくれるだろう」と。そのことばにはげま

されて、ラルーは、マヤをつれて出発しました。

さて、とちゅうには、さまざまなぼうけんが、まっていました。ふたり

をたすけてくれたのは、はたして、ゾウだったでしょうか。それを知ったと

き、みなさんにも、さらにひとつのあたらしい目が

ひらけることでしょう。

なかやまともこ
中山知子





もくじ

はじめに 1

1 ラルーのけっしん 6

2 やねの上の一夜^{うえ いちや} 17

3 ぼうさんと、かねかし 32

4 アラハバッドの町^{まち}で 45

5 ラクタおいのヤンドウ 61

6 バオリのなかで 78



7 マハラージャのむすこ 89

8 ふみきりばん 100

9 小さなはたおり、 119

10 自転車にのった少年 133

11 対盲協会 145

あとがき 中山知子 198

表紙・さしえ 武部本一郎



★著者紹介

エイメ・ゾンマーフェルト

(Aimée Sommerfelt) ノルウェーに生まれました。彼女の夫はオスロ大学の教授で、夫の仕事でインドに同行した時、その国の子どもたちの生活に興味をもち「アグラへのぼうけん旅行」(原題「アグラへの道」)を書き、ノルウェー児童文学賞、アンデルセン優良賞を受けました。なおほかに、この作品の続編で、「白いバンガロー」があります。



★訳者紹介

中山知子=1926年、東京都に生まれました。日本女子大学を卒業。日本児童文芸家協会会員。著訳書に、「星の木の葉」「花ものがたり」「ミツバチマーヤのぼうけん」「オーヘンリー短編集」など、たくさんあります。

VEIEN TIL AGRA

by Aimée Sommerfelt

Original Norwegian language edition published

by Damm, Oslo.

Copyright © 1959

This book is published in Japan by AKANE-SHOBO, Tokyo, arranged through Eli Krog, Oslo and Orion Press, Tokyo.

Translated by Tomoko Nakayama.

アグラへのぼうけん旅行^{りよ こう}

A. ゾンマーフェルト^作 中山知子^訳 武部本一郎^絵



Ⅰ ラルーのけっしん

ラルーは、カトワの村の少年でした。

カトワは、インドの国の、どこにでもあるような、小さな村で、このお話も、いつもとかわらない、カトワの村の朝からはじまります。

その朝、ラルーは、村のいどへ、水をくみにでかけました。

ラルーのまえを、かけていくのは、イヌのカンガです。灰色の、やせたイヌだけれど、じつは、音楽にあわせてダンスをしたり、あと足でつまさき立ってあるくことのできるイヌです。

子イヌのころ、カンガは、サーカスで芸をしこまれてそだちました。ところが、あるとき、ひとりの男が、カンガをぬすんだのです。男は、カンガを見せものにして、おかねをもうけるつもりでした。

けれどもカンガは、そんな男のふえでおどるのは、いやでした。だから男の足にかみついて、にげだしてしまいました。それから、おなかをすかして、カトワの村



へさまよってきたところを、ラルーにみつけれ
たのでした。

ラルーは、イヌにカンガとなまえをつけて、こ
っそり、たべものをわけてやりました。それ
からというものの、カンガは、ラルーのいく
ところならどこへでも、ついてあるくよ
うになりました。といっても、カンガ

は、とてもきかんぼうだったので、
氣にいったときでなければ、芸を
見せません。でも、ラルーのイ
ヌとしては、うってつけです。
なにしろ、ラルーは、とてもき
かんぼうな男の子ですから。
頭に水がめをのせて、ラルー
はカンガのあとから、はんぶん

かけ足でした。かけていくと、道に、赤ちゃけた土ぼこりがたちます。すると、ちようど、おうらいをよこぎろうとしたとき、友だちのカマクにでくわしました。

ふたりは、立ちどまると、水がめをおろして、おしゃべりをはじめました。カマクは、サトウキビをかみながら、なにかはなしたそうな顔だったのです。

「アグラにね。」

と、カマクがいました。

「病院があつて、そこへいけば、わるい目をなおしてもらえるんだってさ。」

「まさか。」

「ほんとうだよ。アグラにはね、目をなおすお医者がいるんだって。それも、インドじゅうで、いちばんうでききのお医者なんだってさ。」

「きみ、それ、だれにきいたの？」

「ぼくのおじさんがね、きのう、かえってきたんだ。おじさんったら、ぼくたちみたい、目がよく見えるんだぜ。」

ラルーは、びっくりしました。カマクのおじさんといえ、もうほとんどめくらになつてしまつて、一年もまえから、駅まへの石だんにすわつて、とおる人たちに

ぼうしをさしたす、こじきぐらしをしていたのです。

「目が見えるんだって？　じゃ、もう、こじきをしなくてもいいんだって？」

「だからさ、ぼくたちみたいにな、よく見えるって、いつてるじゃないか。」

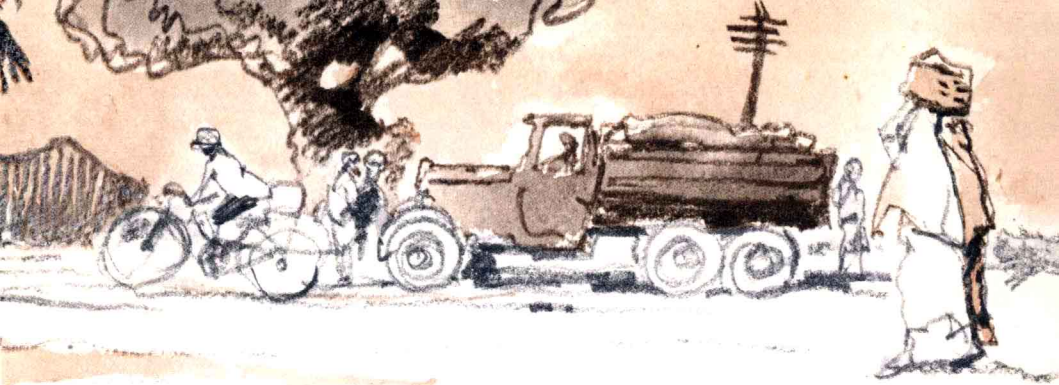
「ああ、マヤ。」

ラルーは、おもわずさけびました。妹のマヤは、目が変わるのです。それも、一年、いいえ、一月一月と、だんだんわるくなっていくのです。

このことを、うちの人たちは、きんじょには、ないしよにしていました。というのは、マヤが、となり村の学校にあらがることに、きまっていたからです。

もし学校の先生が、マヤの目がよく見えないことを知ったら、せっかくの席は、ほかの七さいの子どもに、ゆずられてしまうでしょう。なにしろ村には、学校にあらがりたい子どもが、おおすぎるのですから。

それに、マヤが学校にあらがれないとなると、ラルーは、もう一つ、こまったことになるのです。学校へいけなかったラルーは、マヤが学校でならってくることばや字を、一つのこらずおぼえてしまうつもりでした。だから、マヤの頭にはいらぬものは、けっして、ラルーの頭にもはいってこないのでした。



「きみのおとうさんにそういつて、マヤを、アグラへつれていつてもらえよ。」

と、カマクがいました。

「そうすれば、お医者^{いしや}が……。」

「ばかなこというなよ。田^たうえどきなのに、ぼくや、小^{ちい}さな弟^{あとうと}たちをおいて、おとうさんがでかけられるもんか。たとえ、マヤの目^めがなおったつて、そのかわり、この秋^{あき}のコメが、ぜんぜんとれなかったとしたら、いったいどうなるんだい？」

「じゃ、おかあさんがつれていけばいいさ。」

「おかあさんが？ うまれたばかりのあかんぼうだつて、いるんだぜ？」

すると、カマクは、サトウキビに、まっ白^{しろ}なはをたてて、わらいました。

「だったら、どうして、きみが、自分^{じぶん}でつれていかないんだい？」

「アグラまで、あるいていけつていうのかい？」



ラルーも、わらって、水がめをもちあげました。

でも、わらいごとではありません。カマクとわかれると、ラルーは、いっさんにはしりだしました。

まだ朝はやかっただので、太陽は地平線のあたり、白いかすみのむこうにかがやいていました。でも、頭の上の空は、雲ひとつなく、まっさおでした。まもなく、やけつくようなかんかんりになるでしょう。ラルーのまえを、とおくまで一直線につづいている道路の上を、ウシにひかせた荷車や、ラクダや、自転車、あとからあとからとおります。それを自動車が、けいてきをならして、かきわけていきます。

これが、アグラの町へいく本通りなのです。

もし、ぼくが、自転車をもっていたなら！ さもなければ、せめて、おとうさんが、荷車のウシをかくれたなら！ そうすれば、ぼくだって、マヤを、らくにアグラまでつれていけるのに。

道は、とおくとおく、ゆくては、地平線のもやのなかに、とけこんでいるようです。自動車がとおるたびに、もうもうと、土ぼこりをまきあげると、その土ぼこりが、ゆっくりと、あるいている人や、荷車の上に、つもるのです。

道にそったマンゴーの木。そのえだには、大きなサルがすわりこんで、下をながめています。サルは灰色。木も灰色。かわききった草原の上をはしる道は、どこもかしこも灰色なのです。

こんな道を、夜とおっていけば、まっくらやみで、こわいジャツカルにもあうでしょう。ジャツカルは、キツネとオオカミのあいので、いつも、夜なかに、おなかをすかした声で、ほえています。それに、おそろしいヘビだって、でるでしょう。カマクは、あんなに氣がるなことをいったけれど、たった七さいの妹をつれて、アグラまであるいていくなんて、よいなことではありません。

あれこれかんがえながら、ラルーは、いどのほうへいく小道へはいつていきました。頭のなかは、まるで、石をぶつけられたハチのすのように、わんわんなりひびいていました。

「おかあさんは、あかんぼうをおいていけないし、おとうさんは、田うえで、手が

はなせない。おばあさんは、年をとりすぎている。だから、ぼくがつれていかなかったやならないのだ。だけど、ぼくは、こわい。とても、そんなことできやしない。ああ、昼だったら、ぼく、つよいんだけどなあ。」

いどのまわりには、もう、村の人たちが、大ぜいあつまってきました。女の人たちが、ため池のそばにひぎをついて、せんたくものを、せっせと、せんたくぼうでたたいています。目かくしをしたおウシが二とう、大きな木の車輪をまわして、ぐるぐるまわりあるいています。これで、いどの水をくみあげています。車輪の上のバケツから、きれいな、つめたい水があふれて、ため池にながれこみます。そこで、女の人たちはせんたくをします。ウシやウマたちは、水をのみます。だれもかれも、にぎやかに、おしゃべりをしています。

ラルーのおかあさんは、いそがしそうに、あらいあげたせんたくものを、草の上にひろげていました。こうすれば、かえるまでに、きつい日光で、すっかりかわいてしまいます。あかんぼうは、すこしはなれた木かげにいます。ロバのスルミは、ひづめを池にひたして、水をのんでいます。そのそばに、スルミのたづなをもってマヤが立っていたのです。



ながい、はばのひろいズボンをはいて、ひざのあたりまである、赤いブラウスをきています。おかあさんのようなサリートをまとうには、まだ、小さすぎるからです。マヤの、ながい、まっ黒なおさがみと、青い目は、家じゅうのじまんでした。インドでは、青い目は、とてもめずらしいからです。マヤは、とてもきれいな顔だちの、りこうな子で、それに、きょうだいで、ただひとりの女の子でした。

ラルーは、小さく口ぶえをふきました。マヤは、はっと気がついて、うれしそうに、たづなを、スルミのせなかにほうりあげると、にいさんのところへ、かけよりました。

ところが、目がよく見えないものですから、うっかり、よその人のせんたくかごにつまずいて、ころんでしまったのです。かごにはいっていた、かわかしたばかりのせんたくものが、どろんこのなかになげだされました。

「この、ろくでなし！」

もちぬしのおばさんは、両手をふりまわして、しかりつけました。ほかの人たちは、わらいました。わあっと、はやしたてまし